
ポケモントレーナー臨也w

蒼村サキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモントレーナー臨也

【NNコード】

N2833N

【作者名】

蒼村サキ

【あらすじ】

ひょんなことからポケモンの世界に迷い込んだ臨也と静雄。二人は無事に元の世界に帰れるのか。

前編（前書き）

初投稿です m(—)m

初執筆作品の息抜きに書いてたら、こっちの方が早く出来そうですが（笑）誤字脱字・読みにくさ等は見逃して下さい。

注意

- 1 .両原作の説明はありません。
- 2 .かなり原作無視してるかと。
- 3 .臨也と静雄が仲良しです。
- 4 .ですが腐ではありません。
- 5 .静雄が比較的大人しいです。
- 6 .口調とか…設定とか…。

キりないのでこの辺で…。

私得のクオリティなので色々アレですが、最後までお付き合いしてもらえれば嬉しいです。

「シズちゃんのせいだよ

「うわせーな。元々はてめえが悪いんだろ？」「

氣づくと、臨也と静雄は知らない場所に立っていた。見るからに小さな町で、見渡しても民家が数件と大きな建物が一件だけしかない。あとは草むらと川になつていて、田舎の代名詞とも言える雰囲気だ。

臨也は小さな看板を見つけた。そこには雑な字でこいつ書かれていた。

『いこはマサラタウン』

「…ねえシズちゃん。マサラタウンってどこかな？」

少し興味を持った臨也は、傍にいた静雄に尋ねてみた。

「そんなもん俺が知るわけねえだろ。うう…てめえとこみると口クな
事がねえ」

「まあとりあえず、あの大きな建物に入つてみようよ」

「ああ？ なんで俺がてめえなんかと行動しなきやならねえんだ？」

「…シズちゃん。」こんな場所に来ちゃった原因は君にあるんだよ？
それ自覚してる？」

短気に怒る静雄に対して、臨也は呆れた様な表情を浮かべた。

2 時間程前。

場所はいつも池袋。

そこには二つもと回じ変わらない日常があつた。

いつものように取り立てを終えた静雄が池袋をフラフラと歩いていくと、視界の隅に黒ずくめの青年がうつった。

静雄の天敵・折原臨也である。

「……あせ——！」

またいつものように怒り狂いながら、静雄は標識を片手に振り回して、臨也を追いかけ回した。

そこまではいつもと同じ。変わらない日常だった。

その日、いつものように逃げる臨也が街角を曲がると行き止まりに当たってしまった。

静雄は標識を槍投げの如く勢いよく投げ飛ばした。

標識は物凄い勢いで臨也へ向かって飛んでいく。臨也はギリギリで躰した…が、後ろから静雄が迫つて来ていていたので隠し持っていたナイフで対抗する。

躰した標識は壁を突き抜け、壁の向こうの民家の庭にある巨大な機械に突き刺さつて止まつた。機械から発生した白い煙が瞬く間に二人を包み込んだ。

そして今に至る。

原因を思い出し、少し責任を感じたのか静雄は大人しくなつた。そこに臨也は付け入る。

「とりあえずあの建物に行つてみようよ」

「…ちつ。仕方ねーか…」

『オーキド研究所』

中に入ると、白衣を着た白髪の老人がいた。老人はすぐにこちらに気づいた。

「おや、見かけん顔じゃな。君達は何者じや？」

「あ？ 誰だてめえ」

「不服だけどシズちゃんに同感だよ。人に名前を尋ねる時はまず自分から名乗るべきだよね」

「そうか、それはスマンかつたな。わしはオーキド博士じゃ、みんなからはポケモン博士と呼ばれとる」

「…ポケモン？」

聞いたことない単語に臨也は興味津々だった。

「何だそれ」

「なに？ 君たちはポケモンを知らんのか？」

オー・キド博士は驚いた顔をした。

「ポケモンを知らない奴がいるとは……。もしかして君たちは他の世界から来たのではないかな?」

「さあね。……俺はタダで情報を売つたりしないよ

「……なるほど、では少し話をしようか。一人ともつてきなさい」

三人は応接室に入った。オー・キド博士の向かい側に臨也と静雄が並んで座っていた。

「と、う、う、え、す、君たちの名前は何と言つたんだ？」

「俺は臨也。そしてこいつがシズカちゃん」

「ああ？俺には平和島静雄って名前があるつってんだ？」

「臨也くんと静雄くんじゃな。さて、名前が分かったといふでこの世界の話をしようかの？」

オー・キド博士はポケモンの話を始めた。

当たり前の様にこの世界に存在するポケットモンスター。略してポケモン。

友達の様に触れ合い一緒に過ごしている者、ポケモンマスターを目指し旅をする者、また悪い奴にはポケモンを道具の様に扱う者がいること。そもそも種類がいて、今現在でも全種類は確認されていないこと。

分かつていろ事を色々と話した。

「なるほどね。つまりこの世界は人間よりポケモンの方が圧倒的に多いってことかな。いずれ立場が逆転されるかもね。興味あるなあ」

「おお。ポケモンに興味を持つてくれたのか」

臨也の発言にオーキド博士はとても嬉しそうに食いついた。

「まあ俺としては、こんなに静かなシズちゃんを見るの初めてだからね。そっちの方が興味深いよ」

そう言って臨也は隣に目を向けた。静雄はまだ理解出来ていよいような顔をしていた。そして根本的な…一番聞きたかった質問をした。

「…俺らが元の世界に帰れる方法ってのはあるんッスか?」

さつきの会話で、自分の住んでいる池袋とは明らかに違う場所であることは分かる。

帰れるものなら今すぐこでも帰りたい。なぜかそういうわけにはいられなかった。

「ここのずっと先にハナダシティがある。その外れにある岬の小屋に住むマサキなら分かるかもしだれんが…」

「マサキ？」

臨也が詳しく聞くことを思つたその時。

「あー。…もういいっス。後は自分で捜すんで」

静雄は席を立ち、応接室を出ていった。

「え？ ちよつと、シズちゃん？」

「待つんじゃ、町の外は野生のポケモンで危険じゃぞ。わしのポケモンを貸してやるわ」

オーキド博士は近くにあったモンスター・ボールを取り、臨也と静雄に一つずつ渡した。

「これは？」

「モンスター・ボールじゃ。この中にポケモンが一匹入つておる。野生のポケモンに遭遇したら戦わせるといいぞ」

二人は使い方を簡単に説明してもらい、オーキド研究所をあとにした。

「マサラタウンを出て5分。

きっとこれは一度とない奇跡なのだろう。臨也と静雄が並んで歩いていた。池袋へ帰るための休戦協定、静雄は不本意ながら協力して帰ることを決意した。

「オー・キド博士だったっけ？ あの人って実はケチだよね」

「臨也はふとそういつつと、どこからか分厚い本を取り出した。

「『ポケモンマスター』を目指すならポケモン図鑑をやるが、元の世界に帰る目的だけならこれでよからひつ……ってただの図鑑じゃない？」

分厚い本には大きな字で

『ポケットモンスター 赤・緑 完全攻略 公式ガイドブック』と書かれていた。

「これで野生のポケモンとやらを調べなさいってことかな

「…たぶんそうだろうな」

静雄は本当は話したくもない相手だが休戦協定のため協力せざるを得なかつた。

「……といひでや」

臨也は「ロロロ」と話を変える。

「シズちゃんが借りたポケモンってなんだろ?」

「あ? 知るかよ?」

「ねえ、出してみてよ!」

臨也に言われずとも静雄も少し気になっていた。自分がどのポケモンを借りたのか。

静雄はモンスター・ボールを投げた。出てきたポケモンは……

かの有名な黄色い電気ネズミ。

「……え? と……これは『ピカチュウ』だね。あはは! 黄色いといひがシズちゃんにそっくりだよ!」

「……ピカチュウ……か」

静雄はしゃがみ込んでピカチュウを優しく撫でてあげた。

ピカチュウは、初対面で親でもない静雄になぜかとても懐いていた。そんなピカチュウに対して静雄もまんざらでもない様子だった。

「おい、臨也」

ピカチュウを片手に抱え、静雄は立ち上がった。

「やついつてめえのポケモンはなんなんだ?」

「シズちやんてば、そんなに氣になる?」

「ハッセーなーとつと出しゃがれ」

「しようがないなあ」とか言いつつ臨也自身も少しだけキドキしながらモンスター ボールを投げた。出てきたポケモンは……。

田玉一つの黒い変な物体。

「…なに?…これ…」

驚いていいのか笑つていいのか、よく分からぬ氣分だった。臨也の持つ図鑑にはどこのにも載つていない。

「…『アンノーン』だとよ」

静雄は薄っぺらいポケモン一覧表を取り出した。片隅に『□□□ふろく』と書かれていた事には気づいていないようだが…。

「あ、本当だ。アルファベットの数だけいるみたいだね。…だとす

ればこれは……『エ』かな？

田舎の上空にのみ黒い物体があることから『エ』だと予測できた。

「…ねえ シズちゃん。ポケモンバトルしたくない？」

「したくなえな」

子供心溢れる臨也はポケモンバトルをやりたくて堪らなかつた。しかしピカチュウの愛らしさに惚れた静雄はそれを拒んだ。

「とかなんとか言つて~。本当は俺に負けるのが怖いんでしょう？」

「ああ？俺がてめえなんかに負けるわけねえだろ！戦わねえのは単にピカ…いや、なんでもない」

結局、少しだけポケモンバトルするハメになつた。お互いに今初めて出会つたポケモンで条件は全く同じ。最低限の事はオーキド博士に教えられていたため、簡単なバトルルールなども知つていた。

「さあ行け～アンノーン！」

臨也は思わず他人のフリをしたくなる程の違和感のなさを見せついた。つまりノリノリなのである。

「…よしー。ピカチュウ、頑張つてこいよ」

静雄はピカチュウを優しく撫でた。そして静かにバトル開始。

……。

「ピカチュウ、でんじば」

ピカチュウの先制攻撃。アンノーンはマヒした。

「アンノーン…めざめるパワー！」

アンノーンは体がしびれて動けない。

「ピカチュウ、でんきショック
アンノーンに23のダメージ。

「ちよつとー、シズちゃんー、痺れさせるとか卑怯じゃないかな」

「あ？いつも姑息な手使つてくるてめえには言われたくないよ」

結局アンノーンはしびれて動けないまま、最後にピカチュウの10万ボルトでどざめをされた。

「シズちゃんに負けるとか悔しいなあ…アンノーンが弱すぎるんだよね」

「…こや、ただ単に嘘でトレーナーとしての才能がねえだけだろ
…まあ、勝つても何も得がないし…別にどうでもいいけどね。さ、
とっとと先へ行こうよ」

負けたことが悔しく、さらに図星をされた臨也は話をそらした。
そして何事もなかつたかのように先を急いだ。

前との投稿日時にかなり時差があり、自分でも忘れそうな頃の投稿になつてしましました。すみません。

しかも、最後のオチはあるのにそれに繋がる話が浮かばず…これ以降全然進みません…

オリジナル小説でも挟んで気を紛らわした方がいいのかもしませんね。

次もいつの投稿になるか分かりませんが、いつまでも長い長い日で見守つて下されば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2833n/>

ポケモントレーナー臨也w

2010年10月13日16時20分発行